

オーストラリア 日本向け生食用ブドウ輸出の品種制限が撤廃

[ASIAFRUIT 2024年7月17日](#)

日本の消費者は、輸入に対する品種制限が撤廃された(告示)ことで、来シーズンからすべての種類のオーストラリア産生食用ブドウを購入することができる。オーストラリア政府は、長い取組みの末に水曜日に発表された市場アクセスの拡大は、オーストラリアの生食用ブドウ産業にとっての勝利であるとした。

過去10年間、オーストラリアが日本に輸出できたのは、クリムゾンシードレス、レッドグローブ、トンプソンシードレスの3品種のみであった。オーストラリアの生食用ブドウ生産者は、次の12月から5月までの生食用ブドウ輸出シーズンには、国内で栽培されている130品種以上の生食用ブドウを日本に出荷することができる。

オーストラリア生食用ブドウ協会のジェフ・スコットCEOは、この業界の取組みは長い時間をかけて行われてきたものであり、この成果は日本への生食用ブドウの輸出を一変させるだろうと述べた。同氏は、「2014年に技術的な市場アクセスが認められて以来、日本におけるオーストラリア産生食用ブドウへの関心は過去10年間で着実に高まっている。しかし、我々の輸出市場の価値は、品種の制約によって制限されてきた」と言う。

同氏は、「オーストラリアの生産者と輸出業者は、日本の輸入業者やバイヤーと強力な貿易関係を築いている。日本の消費者は、オーストラリア産生食用ブドウの品種をすべて味わいたいと熱望していることを我々は知っている。長い間待った末に、それができるようになった」と語った。

生食用ブドウ品種のアクセス改善により、今後数年間で輸出市場の価値は3千万豪ドル増加し、5千万豪ドルになると予想されている。これは、オーストラリア産生食用ブドウの日本向け輸出の初年度に最初の16コンテナが出荷された時とは隔世の感がある。(1豪ドル=約105円)

マレー・ワット農水林業大臣は、オーストラリアの生食用ブドウ産業と農業部門全体の両方にとっての本件の重要性を強調し、「日本はオーストラリアにとって2番目に大きな農林水産物市場であり、オーストラリアの高級生鮮果実の貴重な市場である。これらの規制の解除は、業界にとって重要な進歩である。日本は洗練されて安定した市場であり、長期的な成長機会を提供している」と述べた。

この成果は、オーストラリア産マンゴーの品種制限を撤廃した(告示)今年の成功に続くものである。

オーストラリア 西オーストラリア州でユズ栽培を模索

[FreshPlaza 2024年7月18日](#)

西オーストラリア州南西部の生産者であるスティーブン・ライファー氏は、60ヘクタールの所有地で、独特の風味で知られる日本の柑橘類ユズの栽培に着手した。当初は100本強の樹を植えたが、果樹園を5千本以上に拡大することを目指す。現在、2,500本以上の木が既に植えられているか、植える準備が整っている。引退後も活動的でいようと、労働集約的なプロジェクトとしてユズ栽培を選んだ。同氏は、長生きするためには精神的及び肉体的な活動が重要であると強調している。

ライファー氏の事業は、この地域の肥沃な土壌と豊富な水供給の恩恵を受けており、除草剤や殺虫剤を避けることができる。同氏の農業への実践的なアプローチは、果実のサイズを大きくし、生産物を完売することにつながってきた。西オーストラリア州のレストランからの需要があり、同氏は生産量を大幅に増やすことを計画している。ユズの価格は1kg当たり約39豪ドルと高いが、そのユニークな品質は価格を正当化するだけの価値がある。果実全体を利用でき、様々な利点がある。(1豪ドル=約105円)

ブルーマナビストロのコビー・コックバーン氏ら地元のシェフ達は、特にシーフードとの相性の良さから、ユズの人気が高まっていることに着目している。コックバーン氏の施設は、ライファー氏の会社であるユズ・ウェスト社からユズを調達しており、新鮮な地元産の食材に対する需要の高まりを浮き彫りにしている。

出典: [abc.net.au](#)

(翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。)